

わたし と 小児歯科 ③



まるで遊園地の「大迷路」だね！
夢中で学ぶ児童たちと歯科保健指導

「大迷路」をご存知でしょうか。遊園地などによく見かける大人気の遊戯施設です。その「大迷路」が学校における歯科保健教材として、岐阜県のある小学校で試みられています。下の写真を見ていただければ、「一度は实物を見てみたい」と思った私の気持ちもわかつていただけるでしょう。

岐阜県のJR恵那駅から車で約45分。上矢作小学校の学校歯科医であり、その立場から年間を通じた歯科保健指導を実践されている石黒幸司先生が出迎えてくださいました。

「よい歯とからだの健康迷路」 で共に学び成長し合う 子どもたち



大分大学 教育福祉科学部健康教育学 教授

住田 実

日本学校保健学会(理事)、日本ヘルスプロモーション学会(理事)、NHK DVD教材監修・企画者、【著書】『宇宙と歯の健康』『よい歯とからだの健康迷路』東山書房、【映像作品】NHK DVD教材『新・ぎもん・しつもん！むし歯の予防』(2008年教育映像祭「最優秀作品賞」受賞)

廊下をはさんだ2教室をまるまる使った『健康迷路』。それにしても、限られた校舎面積にどのようにしてこのスペースを確保するのでしょうか。実は、少子化で余った「空き教室」の有効活用なのです。

では、誰がこのような迷路を作ったのか。もちろん児童だけではとても無理でしょう。学校の教職員はもちろん、保護者・地域の人たちの協力も得て作成した大掛かりな「健康教室」なのです。

『健康迷路』で学ぶM君と私の6年間

「ねえ、おじさん、学校の先生なの？」
「うん、そうだよ。九州の大分というところか



- ①「入口」から入ると、行き先々で壁にぶつかり、提示されたクイズや実験の予想に応じて、進路が2~3方向に分かれています。
- ②「間違った予想」の進路を選ぶと「壁に突き当たる」ので、再び元の分岐点に戻ります。
- ③すべてのクイズや実験の予想で「正解」を見つけなが

- ら進まないと、終着点の「出口」に到達できません。
- ④特筆されるのは、教師が案内するのではなく、「低学年生—高学年生」がペアとなり、高学年生が年下の児童の援助をしながら共に学ぶという「ピア(年齢の近い仲間)・エデュケーション」のシステムを採用していることです。



ら来たんだ。大分って、わかる？」

「おおいた？ う～ん、まだわかんない…」

「そうだよねえ。まだ1年生だもんねえ。」

そのM君と初めて話を交わした日から5年後。そのM君がもう6年生に成長して、いま私の目の前にいます。

「ここにちは！ また来てるの？」

「やあ、M君。こんなに大きくなったねえ。今年は保健委員だって？」

「うん、今年は入り口の先にトンネルもあるよ！」

「なるほど、すごいね。ところで、君が1年生だったとき、担当のお姉さんだったUさんのこと、覚えてるかな？」

「覚えてるよ。夏休みにね、コーラの実験したんだよ。いまは僕が1年生の女の子に教えているんだ。」

*

M君が1年のとき、担当のお姉さんだったのは当時5年生のUさん。いったいこの2人がどのような関係なのかー、まずは『健康迷路』という独特な「学習教室」と子ども同士で学びあうシステムについて説明しましょう。

M君とUさん…「低学年一高学年」のペアで学び合うピア・エデュケーション

そのM君がまだ1年生だった7月初旬。初めて同校を訪問した私のための案内役は、当時5年生だった女子児童のUさんでした。

「ここにちは。5年のUです。これから『歯の健康迷路』の案内をします。」

「こちらこそ、どうも。今日は、どうかよろしくお願いします。」

「まずは、こちらが、入口です。」

「ほら、ここに最初のクイズがあるでしょう。クイズを解きながら、迷路を先に先にと進んでいきます」

案内はUさんをはじめ、4名の保健委員の子どもたち。

「このクイズで○と思う人は左に、×と思う人は右の部屋に進みま～す。」

「う～ん、どうかなあ。こっちに行ってみようかなあ…」

「ほらほら、不正解だったら、このように行き止まりで～す（笑）。」

子どもたちから次々と出される懇切丁寧な案内





に、すっかり頭が下がります。

「迷路の最初は、『動物の歯』の勉強から入るんですね。それから『人間の歯』か。それにしても、みんな案内がすごく上手だねえ。どうしてかなあ？」

「うん、あたしたち高学年は1、2年生の案内役なの。だって、まだ小さい子は漢字なんかぜんぜん読めないでしょ」

「えっ、高学年生が案内役？なるほど、遠足のとき手をつないで歩いてくれるお姉さんってわけか！でも、もっと教えて。授業の中で、クラスの先生が案内するのでしょうか？」

すると全員が大きな声で打ち消したのです。

「違うのよ！ここは授業では来ないの！」

なんと、授業以外の休み時間で、高学年生は常に特定の低学年生とペアになって、お互い時間を合わせて一緒に見学するというのです。

*

「あたしなんか、休み時間に来て、説明の練習してるの。小さい子にやさしく教えるって、なかなか難しいのよ。」

「そうそう、わからない言葉なんか、先生に聞いたり、図書館で調べたりしてね。」

なるほど。説明が上手なはずです。

「でも、このあと『人間の食生活』の話が終わ

ると、最後の部屋は、『恐竜の歯』か…。面白そうだけど、これって健康の勉強にどう関係あるの？」

子どもたちとすっかり馴染んだ頃、私はここで、少し突っ込んだ質問をしてみました。

「うん、あたしも最初はそう思ったわ。でもね…、最初は『動物の歯』と『人間の歯』をくらべたでしょ。こうやっていろんな物とくらべていると、『人間の歯とか生活』の特徴がわかりやすいわけ。」

*

その後、職員室に戻り、以上の案内の様子を話したところ、教師たちから「意外な言葉」が返っていました。

「えっ？そんなこと言っていました？」

「私たちの見えないところで、そんな調べものしているとはね。」

「クラスの中で子どもを見ているだけでは、ちょっと気づかないですね。」

高学年生に与えられている「低学年生の指導という役回り」は、いわば教師の眼の届かない所(健康迷路)で、必然的に責任感と自主性を生み、驚くことに「自らの学び」があちこちで自然発生的に花開いていたのです。

その中でも、とくに興味深いエピソードがあります。Uさんが、そっと私に打ち明けてくれた話です。



「あたしの担当の子、ちょっと気になっている。男の子なんだけど、家でよくコーラとかジュースを飲んでいるみたいなの。ねえ、どんな風に言ってあげたらいいの？」

「そうなの。これから夏休みに入るから、何か指導してあげたいね。」

私は、炭酸入りの清涼飲料水を「1杯だけグラスにいれて1時間ほど放置し、炭酸が抜けて生ぬるくなった状態で一口飲んでみると、どんなに甘くて飲めないかがわかるよ」とのアドバイスをしました。「炭酸」と「冷水刺激」が舌の味覚細胞をマヒさせて、<糖分摂取過多>を招いていることを気づかせたいーと思ったのです。

ピア・エデュケーションを支える学校 歯科医・歯科衛生士・養護教諭の専門性

いわゆる教育といえば、「教える人」と「学ぶ人」が存在します。多くの場合、前者は教師（あるいは大人や専門家）、後者は子どもというのが一般的でしょう。だとすれば、上のような<大人の眼の届かない所（健康迷路）>で自然発的に展開される子どもたちの「学び」の例は、どのように解釈したらよいのでしょうか。

勿論、そこでは「大人が介在しない」わけではありません。学校歯科医の石黒幸司先生の全面的

な企画・構成・指導のもと、養護教諭、学級担任、歯科衛生士が各自の立場からクイズや実験を保健委員（児童）に紹介・提案するなど、その専門性の発揮を抜きにしては成り立ちません。言いかえるならば、子どもたちの「学ぶ意欲」は、学ぶに値する学習内容や教材があればこそであり、とくにその「ドラマチックな出会いの演出」が大切であることは、述べるまでもありません。

*

ところで、本実践では、ともすればダイナミックな「大迷路」にすっかり眼を奪われがちですが、経年的な教材の関連について分析することも意義深いものです。

その象徴的な例をM君が1年生からの3年間の教材構成に学んでみましょう。

M君にとって1年目の迷路は、『よい歯の健康迷路』。2年目は『よい歯とからだの健康迷路』、さらに引き続く3年目は、「歯周病から生活習慣一般（栄養一運動一睡眠）、生活習慣病」の内容も含めた『よい歯と健康の探検ゾーン』へと引き継がれています。

すなわち、一見バラバラな印象にもみえる各パートは、「年度別の積み上げ」として慎重にテーマを検討すれば、『健康迷路』が扱う内容は決して「思いつき的」な設定ではなく、前の年に学んだ内容を下地として、次の年にも関連・発展させて理解を深められるという見事なまでの系統性が図られているのです。ここに、小児歯科関係者と学校関係者とのコラボレーションの素晴らしさを改めて見て見ることができるのであります。

●石黒幸司（住田 実／監修）『よい歯とからだの健康迷路』東山書房

